

「間」が重要な日本

「新しい生活様式」は、要するに社会的距離の確保が中心だが、西洋には勝手が違って、日本には馴染みがある。挨拶にキス・ハグ・握手が当たり前の諸外国に対し、日本は、基本的に会釈・お辞儀である。昔の映画で戦地から復員する場面でもお辞儀であり、映画「幸せの黄色いハンカチ」のラストシーンは、ようやく再会したのに主人公の高倉健と倍賞千恵子はハグしたりはしない。

そもそも日本語の「間」を思い返してほしい。

「間を取る」「間を置く」は冷静になるときに使われる。「間合い」は、間を重要なものと考えており、「間に合う」もぎりぎりセーフだ。「間」が近いと「間近」となって親密感や切迫感が生まれる。

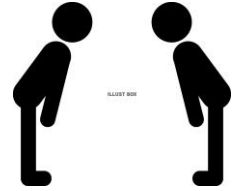
しかし、「間」の取り方がおかしいと「間が悪い」となり、「間」が違っていると「間違い」となる。この「間」が無いと「間抜け」となる。逆に「間」が空きすぎると「間延び」となり、否定的な語感となる。「間を詰める」という表現は、じりっじりっと近寄り、今にも攻撃するような緊張感が生まれる。

要するに、「間」は何かしら良いものというイメージがある。

ある法学者が言っていた。紛争の際、西洋は、まず一歩出て相手と闘い、自分の利益を確保しようとする。対して日本人は、まず一歩下がって相手との間（空間・距離）をとり、それから互いに前に出て納得できるところで折り合うのが基本だと。

日本の伝統と生活様式を守れば、社会的距離もそう難しいことではない。

（山下輝年記）



編集後記

21 世紀の夢

20 年前、21 世紀になれば合理的な思考や進歩的な科学技術等により世界中の紛争は収束する、法の支配で安心な生活が送れる、医学の進歩でほとんどの病気も克服できる・・・そんな平和な時代が来ると夢見ていました。現実は今全く逆になってしまいました。宗教やイデオロギーの対決が先鋭化し、20 世紀に一旦安定したかに見えた世界秩序も混沌とした状態が続いています。その上、法の支配どころか一部の者が権力で支配し、想像もしていなかった新型コロナによるパンデミックが突然生じ、健康面・精神面だけでなく経済面においても深刻な影響を人類全般に及ぼしています。このような状況下において犯罪は一向に減少せず、むしろ増加しているのではないかと危惧していますが、犯罪防止の方策を検討する कांग्रेस さえリアル開催が危ぶまれていることは、誠に残念です。

一方で、自粛が求められてリモート勤務を余儀なくされたおかげで、WEB での会議やオンラインでの広報等が進み、当財団も本メールマガジンの発刊に繋がり、合理化・省力化が図られた部分もあります。歴史上人類にとって大きな試練は幾たびか訪れましたが、その都度乗り越えて現在があるので、今回もきっと乗り越えて予想以上の「夢」が実現すると信じています。

市井の人々の願いは、健康で安らかな生活を送ることが第一と考えていると思われ、ましてや犯罪に巻き込まれることなど微塵にも想像していません。しかし、突然電話で「還付金があり・・・」とか、アポ電強盗なるものも取り沙汰されています。逆に留守中には窃盗の被害に遭うなど、いつ我が身に起こってもおかしくない時代になってしまいました。犯罪をなくし、皆が安心して豊かに暮らせる社会の実現を目指して協力しようとの目標が当財団のスローガンですが、数々の障壁が生じて直接の意見交換さえままならない現状から早く脱却し、再び国内外の研修参加者と直接触れ合うことができる平和な日が早く訪れることを切に願っています。（鈴木祐三記）